

技術倫理は創造性の源泉

小野京右

この度笠木伸英会長より技術倫理委員会の委員長を仰せつかりました。2002-3年に庶務理事として会員部会長を務めた際に、山川宏委員長の技術倫理委員会のメンバーに加えさせていただき技術倫理、機械学会での倫理規定の取り扱い方などについて考えたことがあります。大学生時代に科学論・技術論、理工系学生として社会に係わる論理とは何かなどについて追究したことがあります。その後13年間の電電公社の研究所での研究開発、23年間の大学での研究と教育の中で主体的・創造的な研究者、技術者を育成するとは何かと考えてきました。当時倫理という言葉は用いず思想という表現でしたが、21世紀の創造的な研究者、技術者の思想性は技術倫理と不可分ではないと思います。一方、私の係わった情報機器の世界では、技術の長期信頼性は重要な性能指標の一つであります。開発時に完全を期してもなお実用での保全を通じて改善していかなければならない難しい問題であることをも知りました。このような体験をもつ筆者が、これを機会に、若い機械学会会員の皆さんに、技術倫理とは21世紀の技術者・研究者にとって創造性の源泉であるということを書きたいと思えます。

広辞苑によれば、倫理：実際道德の規範となる原理、倫理学：社会的存在としての人間の間での共存の規範・原理を考究する学問とあります。よって技術倫理とは、社会的存在としての技術者の在り方を考えることといえましょう。倫理は道德と同義のように思われますが、その本質はより広い関係の中で自らの在り方を考える姿勢であると考えます。

倫理はその内容よりも、まずその人間が自分の生き方について見つけ、自らが関係的・社会的存在であることを自覚し、関係的・社会的存在としての在り方を考えようという姿勢をもつという主体的条件が最も重要になります。最近高校でも倫理、社会倫理などの教科書があります。数年前にその一冊を読んだことがありますが、現代に如何に生きるかという問いに応えるために過去から現代までの人類の思想史を易しく解説していて大変感銘しました。しかし受験生が受験勉強の過程でこの倫理を勉強したとしても、単に思想史の知識を得るだけで自分の生き方にどれだけ参考になっているかが疑問です。倫理は知識の問題ではないからです。現在大学で技術倫理教育がなされていますが、学生が自ら現代に如何に生きるかという自問をし、教育を通じてこれまでの生き方に変化が無ければ倫理を学んだことにはならないのではないかと思います。

ほとんどの大学生は、入学時の私がそうであったように、自分の良き生活のため、自分が社会的に偉くなるために一流大学へ入学しようとし、入学したら自らの生きる糧としてまた試験によい点を取ろうとして勉強をしているのではないのでしょうか。しかし倫理の出発点はこのようなこれまでの家庭や世間から与えられた通念に疑問を抱き、分業化社会の専門家というよりも全人格的な人間として社会の中で生きることの重要性と自己に内在するこのような人間的な欲求を自覚するところにその出発点があります。そして倫理とは詰まるところ、自分の即自的な利益というよりも、人類社会の中での自分の意義を見だし、社会的・歴史的に自分の在り方を位置づけながら専門家として社会に価値のある行為をしていこうとすることだと思えます。このような主体性を形成する過程で、人類がより広い人間集団として、より高度な科学技術を用いて生きるために必要であった思想の歴史を学ぶことにより、現代の諸問題に対処する自分の思想をより堅固にまた歴史的に必然的なものと確信することができるのです。

このような倫理観や主体性は今の日本で極めて重要になってきています。1990年頃までは日本は欧米の科学技術と社会の構成法を学びそれをまねれば何とかやっていくことができました。しかし1990年代に至り日本はsecond runnerではなく、front runnerとして世界を切り開いていかなければその存在意義がなくなりました。また輸送技術や情報通信技術の発達によってすべての行為がグローバル化してしまいました。よってこれからの企業は人類の幸福のために世界を如何に発展的に創造していくかという人類社会の目標を描くことが必要であり、またそれにそって自ら課題を設定していく必要があります。実際、米国の一流企業はかねてよりそのような立場で世界戦略を立ててきたのです。個人の行動としても、世界をリードする研究や技術を推進するには、このような倫理的立場に立ち世界の人たちとフランクに交流することが不可欠です。このような立場からみれば、談合問題は過去の技術や利権にしがみついた行為であり、未来技術を開拓しようとする企業姿勢の喪失といえましょう。欠陥技術から出発する不祥事問題や談合問題は単に道徳や法律遵守だけでは解決できません。専門分野に関する学問的・体系的な学習、過去から現在に至る技術の歴史的把握に基づき、より広い立場からの技術の将来を洞察し、新しい技術開発を行うことによってしか解決できないのです。

世界を創造する立場とは、現在の世界を絶対的なものでなく、作られたものでしかないとみて、原理原則に立ち返って技術と社会の在り方を考えることであります。こうしてみると、環境問題、資本のもつ自己増殖原理問題、組織のもつ人間疎外の問題、南北問題、高齢化問題などを解決するような技術と組織作りが人類社会の最先端を開拓する問題意識といえましょう。自然科学や技術研究の世界でも、より本質的で波及効果のある問題を解決する思考過程はこのような倫理観に他なりません。若い人にとって自分が直接係わる技術や研究課題はもっと狭い問題とはいえませんが、その在り方を一段と広い視野、深い学問的な視点、研究開発の歴史的な流れから考え将来の発展の方向を洞察することによって、より価値のある成果を得ることができます。将来の洞察力と成果の価値は、その人間が日頃からどのような倫理的広さを持っているかが重要な役割を果たします。

人間関係における倫理的立場とは、狭い個人の利益と幸福でなく、関係するより多くの人の立場から、更に全体の利益と幸福を考えることだと思います。2人の意見が対立した場合にも、自分の主張ではなく、両者の立場の上に立った解決案を考える弁証法的思考が重要となります。公平性、平等性を考慮したルールや組織作りとそれに寄与する技術が、より創造的で社会的にインパクトを与える技術となるでしょう。自己愛から家族愛へ、企業等の組織愛、地域・郷土愛、ナショナリズムから更にインターナショナリズムへという方向がやはりより高い倫理レベルではないかと思えます。

このような自分の利害関係や特定の階層の利害関係を越えた人類の立場からの将来の社会や技術の提案は、やはりより高度な教育を受けた専門家に期待するしかありません。高等教育を受けた人間はいわば特権階層に属しますが、そのような自分の特権的立場を批判的に見つめて自分だけの利害のためではなく、人類社会の中での自分の使命を自覚した専門家としての誇りを持ち、特別な権力、特権、富に支配されない自由な立場から将来を洞察する発言が求められています。機械学会の倫理規定はこのような世界をリードできる創造的な専門家としての主体的思想の形成を期待していると考えます。